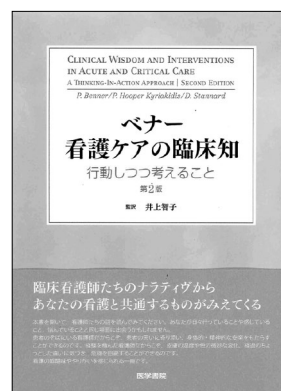


『ベナー看護ケアの臨床知
行動しつつ考えること 第2版』すでに知っていたが、
表現したことがなかった
ことを言葉にする

著：パトリシア・ベナー、パトリシア・フーパー・キリアキディス、ダフネ・スタンード

監訳：井上智子／定価：6,195 円(本体 5,900 円+税 5%)

発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



本書は、日本での初版から8年を経て出版されたものである。満開の桜色の表紙は、清楚で明るくてすぐに開きたくなる。誘われるようにページをめくると、インタビュアーにより看護実践が紹介されている。本書の意図は、「自分はすでに知っていたが、表現したことがなかったことを言葉にしたの」を感じてもらいたいことだという。

実際看護師は、言葉以上に多くのことを知っている。看護を積み重ねることで経験することは多く、随所に宝が埋蔵されているはずである。しかし、残念ながら私も含めて多くの実践者は、貴重な看護経験を言葉にして広く伝える方法や機会をもってこなかった。本書は、看護の隠れていたものを見えるように示し、行動し考えることと推移を見通すことで、手の届かないものを手に入れる看護への示唆が散りばめられている。それゆえに本書は925ページという大作ながら、繰り広げられる豊かな看護実践に深い感動を覚えながら読み進めることができた。

タイトルの、「行動しつつ考えること(thinking-in-action)」で、クリティカルな場面で状況が刻々と変わっていくなかで、行動しながら考え、推移を見通すことの必要性を紹介している。そして、看護ケアの臨床知を導き出すため、新人看護師から熟練看護師までを対象に、看護実践のあるがままの姿を記述し臨床状況に焦点を当てている。実

践に関する271件の新しい事例からは、状況についての内省を行う技術を磨くことや、臨床知を導き出す創造的なプロセスを示している。多くの教育や臨床状況の下で活用したいものである。特に目を引いたのは、実践における思考の習慣化である。教員や指導者自身がまず「行動しつつ考え、また行動すること」を培う必要があろう。

第2版は、最終章に倫理的・臨床推論の実践に基づいた「教育方法と提言」が追加された。内容は、「看護師への実践の教育の課題、状況下での学習、講義と臨床教育の統合、看護のナラティブを書くガイドライン、学問として講義と臨床学習との統合の提案」などである。著者は冒頭で「看護について学んでいるだけであり、看護師になることを学んでいない」と看護教育への苦言を呈しているが、それゆえ、「看護師として働くことを学びながら成長していくための提言」と受け止めることができる。

文中の「あなたはどんなことに気づきましたか?」という臨床推論に至る最初の質問は、われわれが基礎看護学実習でも活用している。その他にも状況下で学習を深める発問が種々紹介されていた。実習や新人教育でこれらの質問を用いると、どんな答が導き出され成長につながるか非常に興味深い。本書は、ベナー博士からのすべての看護師への新たなメッセージである。